

IV まとめ

1. 考古学的調査成果から見た丸山城跡

小笠原氏の最後の居城である丸山城については、平成9年刊行の発掘調査報告書において詳細に検討・記述されており、「山頂の館」として国内でも希有な存在であると評価された。この評価は現在も大きく変わることはないが、近年、この遺跡の再検討がなされ、吉川元春関連城館跡群や益田氏城館跡との関係も議論できる環境が整いつつある。今回の調査はその流れの中で、現在の目であらためて丸山城を見ようとした試みであった。その結果、これまでほとんど調査の及ばなかった石垣や周辺の曲輪群、関連する山城跡、そして山麓の寺院跡に所在する石塔群など、以前は知り得なかった情報がまだまだ眠っていることが確認できた。以下に簡単に成果をまとめておきたい。

- ①石垣調査では、近年指摘された吉川元春館の石塁構造との類似性が確認・検証され、周辺曲輪群も同様の石塁をもつ屋敷地の可能性が浮上した。「山頂の館」は「山頂の館群」となる可能性がある。
- ②出土品調査では、最新の考古学的分析が行われ、吉川氏関連城館群出土品との類似性が明らかにされ、他の同時期の遺跡との比較研究が可能となった。
- ③小笠原氏関連城郭の調査では、考古学的検討により伝承の真実性が具体的に検討できる成果を得た。とくに小笠原氏の丸山城以前の居城である温湯城跡については、各防御施設の造りが想像以上に丁寧に普請されていることが確認されたほか、周囲の丘陵において新たな陣城群が発見された。丸山城と全く異なる「最強の山城」とそれを完全包囲する毛利方の陣城群という景観が明らかにされた意味は大きい。
- ④関連石造物調査では、関連寺院である大竜寺跡に、戦国期の石塔がまとまって存在していることが確認され、移転先の石見銀山大龍寺との比較検討により、寺院移転の真実性がほぼ確かめられた。

こうした考古学的調査は、新たな発見をもたらすのみでなく、文献史学の調査研究と連携することで、より大きな成果をもたらすこととなり、新たな歴史像構築に役立つ方法である。例として、今回明らかとなった大竜寺の銀山移転がある。江戸時代の文献が無ければ、今回の成果のみならず、調査自体実施されなかったかもしれない。大竜寺は報告で触れたように、移転先が銀山の支配領域であり、毛利氏下の銀山代官らと、大竜寺と共に銀山に移転したであろう小笠原氏配下の三原住人との関係性が課題となるであろう。また、移転後の大竜寺跡の石垣は、銀山で数少ない戦国期の石垣遺構であり、この時期の石垣は山吹城や休役所など、極限られた施設にしか採用されていないことから、これらの石垣と丸山城の石垣の比較研究も必要であろう。

以上、今回の調査で丸山城の歴史と、石見銀山の歴史がどのように重なり、そこで小笠原氏と吉川氏がどのような関係で動いたのか、という難問解決の糸口を見つけたように思われる。明らかにされた成果は氷山の一角に過ぎず、まだまだ眠っている歴史の断片を調査することが求められよう。今後も町内のみならず、石見銀山をはじめとする周辺地域の小笠原氏関連資料の調査が望まれ、その成果に期するところ大である。

<参考文献>小都隆[石見丸山城跡の再検討]『西国城館論集Ⅱ』2012年、中国・四国地区城館調査検討会

2. 文献史学から見た丸山城—石見小笠原氏について—

井上寛司

1. 石見小笠原氏は、甲斐国小笠原村（岐阜県南アルプス市）を名字の地とする甲斐源氏の末裔。信濃小笠原氏の一族が南北朝期に川本郷（もとは益田氏の所領で「川本久富」と称した、婚姻により小笠原氏が取得）を得たことで、ここに石見小笠原氏が成立した。
2. 石見小笠原氏はいくつかの画期を経て歴史を刻んだ。
 - 第 1 画期：南北朝期…江川北岸の三原地域に勢力を拡大し、ほぼ現在の川本町全域を掌握
→「川本町」の行政区画単位としての成立は、直接的には南北朝期まで遡る。
 - 第 2 画期：天文 11・12 年（1542・43）…守護大内氏と結んで、川本町域とその周辺のみならず、邑智郡を超えた邇摩郡・那賀郡にも勢力を拡大。
 - 第 3 画期：永禄 2 年（1559）…毛利氏への服属にともなう温湯城からの退去により、本領川本郷と家城を失って江川北岸の三原地区・甘南備に拠点を移す。
 - 第 4 画期：永禄 5 年（1562）…福屋氏の滅亡を機に、その旧領などを得て、石東地域における最大勢力へと発展。
 - 第 5 画期：天正 19 年（1591）…太閤検地により所領を大幅に削減されて石見国を退去。
3. 石見小笠原氏は中世石見国、とりわけ石東地域の中世史を語る上で欠かすことのできない重要な位置を占めているが、小笠原氏の滅亡により関係文書が散失し、未だ十分解明されていない。しかし関係文書は多く、500 点近くを数えることができる。
4. 中世石見小笠原氏がとりわけ注目され、重要な位置を占めるのは、石見銀山との密接な関わりにある。
 - ・一般に石見銀山の領有をめぐる、大内・尼子・毛利氏と石見小笠原氏の 4 者が激しい争奪戦を展開したとされている（『新修島根県史』など）。
 - ・しかし、守護・戦国大名の大内・尼子・毛利氏と、その配下にある国人領主の石見小笠原氏が肩を並べて銀山の争奪戦を展開したというのは奇妙。事実とは認めがたい。
5. 石見小笠原氏（のみ）が尼子・毛利氏などと伍して銀山の領有を争ったと考えられた理由→天文 11 年（1583）以後の石見小笠原氏が、大内（陶）氏の領国支配体制の下で、次の 3 つの条件を合わせ持つことによって、大きな現実的影響力を保持したこと。
 - 1) 銀山の位置する佐摩村の領主であったこと（潜在的な地権者）。
 - 2) 佐摩村周辺の邇摩・邑智・安濃 3 郡に多数の所領を有し、銀山周辺一帯に大きな勢力を保持したこと。
 - 3) 石見国全体や邇摩郡・温泉津地域の鋳物師・大工職統括権を掌握していたこと。
6. 毛利氏にとって、小笠原氏の掌握なしに石見銀山の領有は不可能。
→温湯城への総攻撃。永禄 2 年 8 月下旬の開城。→永禄 5 年に毛利氏による銀山領有体制が成立。温湯城開城後も、石見銀山の領有と経営に依然として小笠原氏の協力が不可欠であった。